氷見市埋蔵文化財調査報告第42冊

千 久 里 城 跡

２００５年３月

氷見市教育委員会

氷見市埋蔵文化財調査報告第42冊

千 久 里 城 跡

２００５年3月

氷見市教育委員会

序

富山県の西北部に位置し、能登半島付け根東側にあたる氷見市は、海の幸、山の幸に恵まれ、定住をはじめた人々の生活の場として、数多くの文化財を生み、そして育んできました。

特に室町時代には、能登と国境を接することもあり、数多くの山城が市内に築かれ、その多くが今もその面影を残し、中世という時代を今に偲ばせております。

これらの貴重な文化財を保存し、そして活用を図るため、氷見市では主要城郭測量等調査を進めております。

平成13・14年度に実施しました飯久保城跡に引き続き、今回は千久里城跡の調査を行い、多数の成果を得ることができました。

本書が今後の保存・活用の基礎資料として資するところがあればさいわいです。

なお、調査にあたりましてご協力を賜りました地元をはじめ、関係機関・関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

氷見市教育委員会

例　言

1　本書は、氷見市教育委員会が国庫補助金・県費補助金を得て、平成15・16年度に実施した千久里城跡の調査報告書である。

2　調査は富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を受けて、氷見市教育委員会が実施した。

3　調査事務は氷見市教育委員会生涯学習課が担当した。担当者は下記の通りである。

　課長池田晃・主査（文化総括担当）尾矢英一・学芸員廣瀬直樹

4　調査は氷見市教育委員会生涯学習課主査大野究が担当し、廣瀬が補佐した。

5　本書の編集・執筆は大野が担当した。

6　発掘調査参加者：谷内健一・安土健二・下野孝男・万田栄作・宮崎清・香沢正美・飛田健三・山下巽・後山健作・千場勇一（以上、氷見市シルバー人材センター）

7　調査にあたって、以下の機関・個人の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

　中尾地区・大野地区・上田地区

　西井重洋・高岡徹・斎藤隆・越前慶祐（以上、富山県埋蔵文化財センター）、中居敏雄・長井重吉・越田太作（以上、地元）

目　次

第1章　調査に至る経緯 …… 1
第2章　千久里城跡の立地と歴史的環境 …… 2
第3章　調査の成果 …… 5
第4章　ま と め …… 20
参 考 文 献 …… 28
付　編　千久里城関連史料 …… 30(1)

図 目 次

第1図　周辺の遺跡 …… 3
第2図　千久里城実測図 …… 6
第3図　千久里城縄張図 …… 7
第4図　千久里城縄張図 …… 7
第5図　千久里城跡周辺平面図 …… 9
第6図　千久里城跡平面図 …… 11
第7図　トレンチ配置図 …… 13
第8図　Ⅰトレンチ断面図 …… 14
第9図　Ⅱトレンチ断面図 …… 15
第10図　Ⅲトレンチ断面図 …… 16
第11図　遺物実測図 …… 17
第12図　B郭東側空堀変遷想定断面図 …… 18
第13図　B郭・C郭間堀切変遷想定断面図 … 19
第14図　氷見市内の南北朝期城郭 …… 23

表 目 次

第1表　周辺の遺跡 …… 4
第2表　氷見市内主要城郭の規模・立地傾向　22
第3表　鞍河氏関連年表 …… 27

図版目次

図版一（1）千久城跡空中写真
（2）千久城跡空中写真
図版二（1）B郭東側の空堀
（2）B郭東側の空堀
図版三（1）Ⅰトレンチ
（2）Ⅰトレンチ
（3）Ⅰトレンチ土層
図版四（1）B郭・C郭間の堀切
（2）B郭・C郭間の堀切
図版五（1）Ⅱトレンチ
（2）Ⅱトレンチ土層
（3）Ⅱトレンチ土層
図版六（1）C郭・D郭間の堀切
（2）Ⅲトレンチ土層
図版七（1）B郭とその土塁
（2）B郭とその土塁
（3）B郭からA郭を望む
図版八（1）C郭とその土塁
（2）作業風景
（3）出土遺物

第1章　調査に至る経緯

富山県の西北部に位置し、能登半島の付け根東側にあたる氷見市は、歴史的にみると越中にありながらも能登の影響を強く受けた地域といえる。これは中世においても例外ではなく、越中・能登両勢力の接点として、軍事的な緊張が絶えずあったと考えられ、市域には南北朝期や戦国期の城郭が、これまでに約50カ所確認されている。

これらの城郭は、規模の大小、記録や伝承の有無にかかわらず、それぞれが中世氷見の歴史を知る上で、貴重な文化財といえる。

しかしながら、市内の丘陵の多くは里山として人々の営みと今も深く結びついており、これら城郭の周辺に開発の手が及ぶことも多い。

そこで氷見市ではこれらのうち主要な城郭について測量等の調査により基礎的な資料を得て、今後の保護・活用に役立てる方針を立てた。

調査の対象となる城郭の選定にあたっては、まず近世の絵図に古城跡として記されている阿尾城跡・森寺（湯山）城跡・小浦（池山）城跡・荒山城跡・飯久保城跡の中で、調査や活用があまり行われていなかった飯久保城跡を取り上げ、平成13・14年度に測量調査と試掘調査を実施した。

これに引き続き、平成15・16年度は市中央部に位置する千久里城跡を取り上げ、測量調査と試掘調査を実施した。

千久里城跡は南北朝期の史料に登場する城であるが、現在残る縄張からは、戦国期にも拡張されて使用されたと考えられている城である。

氷見市教委では、昭和63年度にアンテナ工事に先立ち、小規模な発掘調査を実施しており、石敷が確認され、遺物も出土している。

それ以外では良好な状態で遺構が保存されているが、現在は地元の人もほとんど足を踏み入れることがない状況である。

一方、県の中尾地区は、能越自動車道の通過ルートとなり、隣接する大野地区には氷見インターチェンジが建設されることになった。これに先立ち、中尾地区では平成14～16年度に神明北遺跡・中尾茅戸遺跡・中尾新保谷内遺跡の本調査が、（財）富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所によって行われた。

道路工事も順次進んでおり、この数年で中尾地区の様相は大きく変貌し、今後も様々な開発が予測される地域となった。

このような状況のもと、今後の保存や活用の基礎資料とするため、千久里城跡の調査を行ったものである。

第２章　千久里城跡の立地と歴史的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にあたる。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く旧氷見郡１町17村が合併し、現在に至っている。面積は約230㎢、人口は約５万７千人である。

市域は、南・西・北の三方が標高200～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。丘陵は新第三紀と第四紀層から成り、山間部では地滑りが多く発生する。市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流から成る谷地形であり、上庄川流域以外ではまとまった平野が少ない。市南半部は、主として布勢水海が堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘から成る。

千久里城跡は、市中央部に西から東に向けて張り出した朝日山丘陵から上庄川流域の北へ向かって突き出した支丘の頂部に位置する。

城跡の最高地点は標高137.4mであり、地籍では泉・大野・中尾・上田の各地区にまたがっている。海岸線からの直線距離は約４kmである。

城跡東側の平野には現在建設中の能越自動車道のインターが設けられる予定であり、市内でも今後開発が進むと予測される地域である。

次に、城跡周辺の遺跡について概観しておきたい。

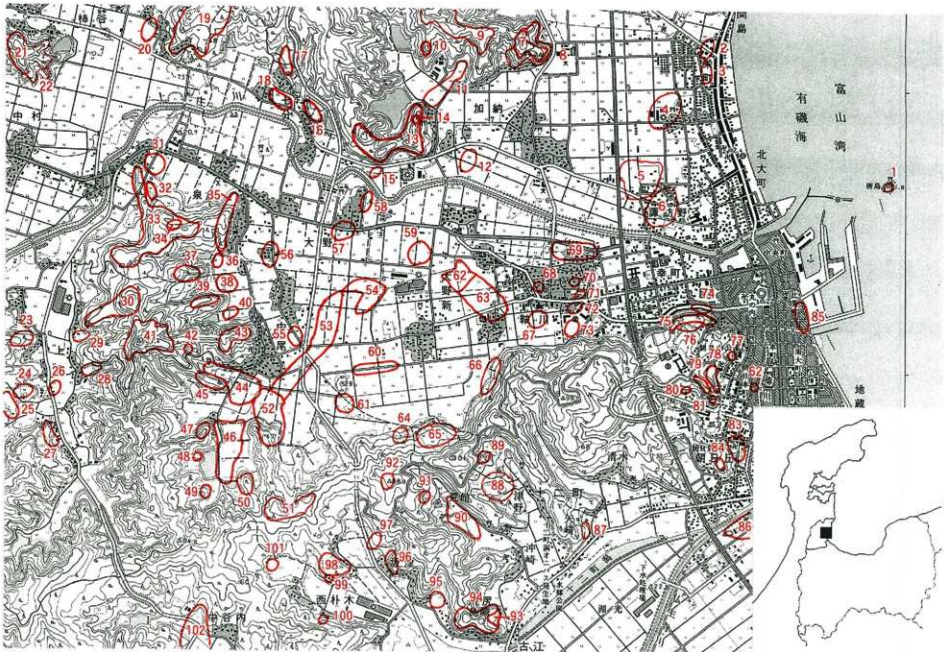
縄文時代：朝日山丘陵の東裾に国指定史跡朝日貝塚が所在する。前期から晩期まで長期間にわたる遺跡である。鞍川寺田遺跡は詳細不明である。

弥生時代：中期では鞍川中Ｂ遺跡がある。上庄川に注ぐ流路ほとりの低地に営まれた遺跡である。後期では鞍川金谷遺跡・鞍川横羽毛遺跡・熊塚南遺跡・沖布Ａ遺跡がある。いずれも丘陵縁辺部から微高地に営まれた遺跡である。弥生終末期では朝日山丘陵上に朝日大山遺跡がある。

古墳時代：上庄川流域は氷見市で古墳が最も多く築かれた地域であるが、朝日山丘陵北側から中尾地区にかけては、分布が希薄である。千久里城跡から東に向けて派出する各丘陵尾根先端には、古墳が単独もしくは数基程度築かれている。各尾根を積極的に利用しているものの、弥生時代の開発状況や周辺の古墳の様相からすると、古墳の規模が小規模であり、その差の解明が今後の研究課題として残っている。

古代：上庄川流域と朝日山丘陵をはさんだ布勢水海北側地域は、阿努荘の範囲である。上庄川下流周辺の湿や湿地がどの程度の広がりを見せていたのかが鍵となるが、中尾地区周辺は安定した農地があまりとれなかったと考えられている。古代の集落は丘陵裾部を中心に営まれていたらしい。

中世：中世の遺跡も丘陵裾周辺に分布する。中尾地区の中尾ガメ山遺跡と、西朴木地区の西朴木フルヤチ遺跡では、埋納銭が出土している。両遺跡は朝日山を横切る山道で結ばれており、阿努荘とそこから分かれた相浦村の境界に位置している。何らかの宗教的意味で埋納された可能性がある。



第１図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

第1表 周辺の遺跡

No	遺跡名	種別	時代
1	宮島遺跡	散布地	中世・近世
2	福積三ツ屋前遺跡	散布地	古代
3	福積三屋野遺跡	散布地	古代
4	加納金宮遺跡	散布地	古代・中世
5	深坊野B遺跡	散布地	古代・中世
6	深坊野A遺跡	散布地	古代
7	加納経予山古墳群	古墳	古墳
8	加納横穴群	横穴	古墳・飛鳥
9	木谷城跡	城館	中世
10	加納新池古墳群	古墳	古墳
11	加納谷内遺跡	散布地	縄文・古代・中世・近世
12	加納桜打遺跡	散布地	古代
13	加納中程古墳群・加納城跡	古墳・城館	古墳・中世
14	加納中程経塚	経塚	中世
15	七分一堂口遺跡	散布地	古代
16	七分一古墳・古墓	古墳・塚	古墳・中世
17	七分一遺跡	散布地	弥生後・古墳・中世
18	七分一B遺跡	散布地	古代・中世
19	柿谷上谷山古墳群	古墳	古墳
20	柿谷入口遺跡	散布地	中世
21	中村城跡	城館	中世
22	中村横穴群	横穴	古墳
23	上山D遺跡	散布地	古墳
24	上田南縁遺跡	散布地	縄文・古代
25	上山E遺跡	散布地	不明
26	上山F遺跡	散布地	古代
27	上山G遺跡	散布地	中世
28	上山B遺跡	散布地	中世
29	上田A遺跡	散布地	古代
30	上田古墳群	古墳	古墳
31	泉横山遺跡	散布地	古代
32	猪毛A遺跡	散布地	縄文～古代
33	泉古墳群	古墳	古墳
34	猪毛B遺跡	散布地	古墳
35	泉住居古墳群	古墳	古墳
36	泉A遺跡	散布地	縄文～古代
37	泉谷内口古墳群	古墳	古墳
38	泉C遺跡	散布地	古代
39	中尾宮城古墳群	古墳	古墳
40	泉B遺跡	散布地	古墳・古代
41	**千久里城跡**	城館	中世
42	竹里山岩屋墓	その他	中世
43	中尾隅嶋古墳群	古墳	古墳
44	泉中尾隅寺	社寺	古代
45	中尾谷古墳群・中尾谷中世墓	古墳・墓地	古墳・中世
46	中尾茶戸遺跡	集落	古墳・古代・中世
47	中尾神子谷内古墳	古墳	古墳
48	中尾ガメ山遺跡	その他	中世
49	中尾山田遺跡	散布地	古代
50	中尾横穴群	横穴	古墳
51	中尾高塚古墳群	古墳	古墳
52	中尾新保谷内遺跡	集落	古墳・古代・中世
53	神明北遺跡	集落	中世
54	大野江潤遺跡	集落	中世
55	大野南遺跡	散布地	古代・中世
56	大野沢遺跡	散布地	縄文・古代
57	KB 3遺跡	散布地	古代
58	大野中遺跡	散布地	古代
59	KB－2遺跡	散布地	古代
60	沖布B遺跡	散布地	古代
61	鞍塚南遺跡	散布地	弥生後～中世
62	鞍川中A遺跡	その他	中世・近世
63	鞍川中B遺跡	その他	弥生中・中世・近世
64	沖布C遺跡	散布地	古代・中世
65	沖布A遺跡	散布地	弥生～古代
66	鞍川横羽毛遺跡	散布地	弥生後～古墳
67	鞍川D遺跡	集落	古代・中世
68	鞍川A中世墓	墓地	中世
69	鞍川金谷遺跡	散布地	弥生後～古墳
70	鞍川C遺跡	散布地	中世
71	鞍川殿舘社遺跡	散布地	中世
72	鞍川B中世墓	墓地	中世
73	鞍川寺田遺跡	散布地	縄文
74	七軒町遺跡	散布地	縄文
75	朝日山城跡	城館	中世
76	朝日大山遺跡	散布地	弥生後
77	蓮乗寺中世墓	墓地	中世
78	上山寺中世墓	墓地	中世
79	朝日寺山古墳群	古墳	古墳
80	朝日長山古墳	古墳	古墳
81	朝日谷内横穴	横穴	古墳
82	朝日横跳遺跡	散布地	中世
83	朝日貝塚	集落	縄文～中世
84	朝日遺山古墳群	古墳	古墳
85	比美浜遺跡	散布地	古代・中世
86	十二町潟排水機場遺跡	散布地	縄文・中世
87	十二町矢崎横穴群	横穴	古墳
88	十二町津野遺跡	散布地	古代
89	十二町ガメ山古墳群	古墳	古墳
90	荒館B遺跡	散布地	縄文・中世
91	荒館ソモキ遺跡	墓地	中世
92	荒館A遺跡	城館	中世
93	十二町鳥崎遺跡	散布地	弥生後
94	鳥崎城跡	城館	中世
95	坂津H遺跡	散布地	弥生
96	坂津横穴群	横穴	古墳・飛鳥
97	坂津遺跡	散布地	古代
98	西林木古墳群	古墳	古墳
99	西林木フルヤチ遺跡	その他	中世
100	西林木ドウガヤチ遺跡	墓地	中世
101	西林木ジョウコウジ遺跡	散布地	古代・中世
102	中谷内遺跡	集落	縄文・古墳・古代・中世

第３章　調査の成果

第１節　聞き取り調査

測量・試掘調査に関連して、千久里城及び周辺地区の地名や伝承などについて、地元の方々から聞き取り調査を行った。

調査は平成16年４月27日、中尾公民館において実施した。地元参加者は、中居敏雄氏（中尾地区）、長井重吉氏（中尾地区）、越田太作氏（大野地区）である。

聞き取りの成果のうち、地名や由道については第５図に示した。

千久里城関連では、

・Ｃ郭東裾の窪地を「ウマノアシアライバ」と呼ぶ。

・長光寺西北の水田付近を「ヤドメ（矢止）」と呼び、これは城から放った矢がこのあたりに落ちたという言い伝えに由来するらしい。

・かつて竹里の岩屋堂の前を通って城へ登る山道があった。

・Ｂ郭は戦前松林だったが、戦後しばらくは豆畑になっていた。

・Ｃ郭とＤ郭は地元の薪山になっていた。

といった話を聞き取ることができた。

しかし城主や、より詳細な縄張に関する伝承は、得ることができなかった。

第２節　測量調査の成果

これまでに発表されている千久里城の実測図・縄張図を第２～４図に示した。

第２図は氷見高校歴史クラブが作成したものである。Ａ郭とＢ郭部分の略測であり、特にＢ郭の規模・形状・土塁の様子が初めて明らかにされた点で重要である。

第３図は高岡徹氏、第４図は佐伯哲也氏による縄張図である。細かい点で解釈や表現の違いがあるが、これらの図によって見張台的性格のＡ郭と、その北東に連続するＢ・Ｃ・Ｄの三つの郭を中心に、そこから派出する各尾根に防御ラインを施すという千久里城の基本的縄張が示され、城の全貌が明らかになったことは大きな意義がある。

また、両氏によって現存の縄張りは南北朝期ではなく、戦国期の特徴をもつこと、戦国期の居城者として、国人鞍河氏の可能性が指摘されている。

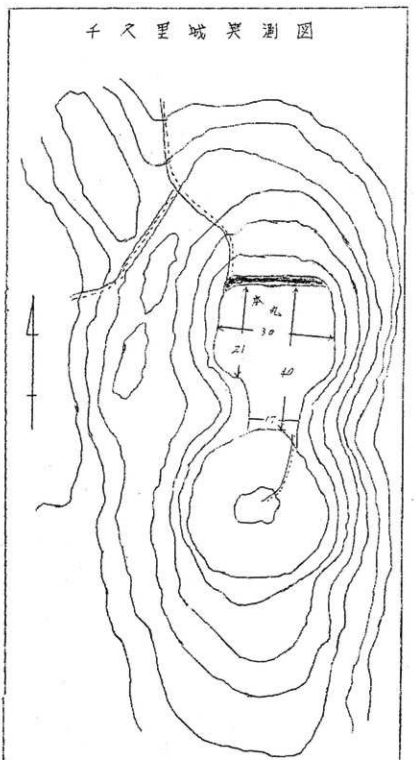
市教育委員会では、より詳細に城跡の状況を把握し、今後の保存・調査の基礎資料とするため、測量調査を実施することにした。

測量調査は平成15・16年度の二カ年にわたって、城全体の平面図を作成した。作成は業者委託とし、原図の縮尺は１／５００、等高線間隔は１ｍである。

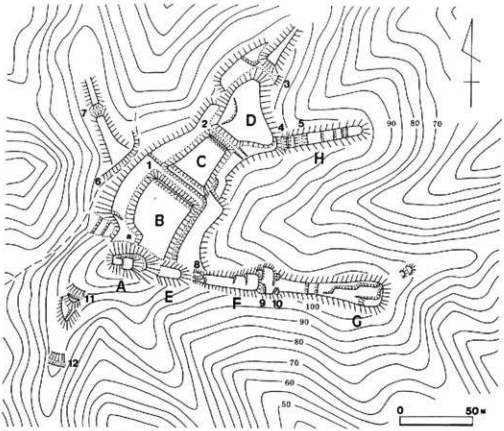
測量成果を１／２０００に縮小したものを第６図に示した。

千久里城の範囲は、南北約240m、東西約280mに及ぶ。

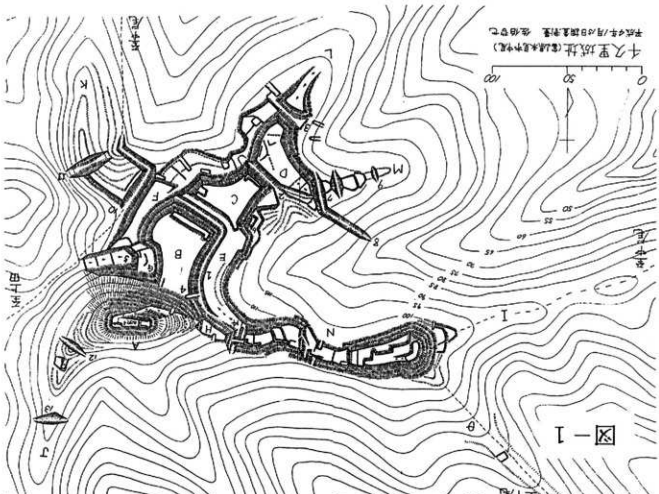
郭と考えられるのが、Ａ～Ｅの５箇所である。このうちＡ～Ｄの４つの郭は、最高所のＡ郭から北東方向へ一列に並び、城の中心部分を形成している。これに対してＥ郭はＡ郭から東方向に派出する尾根の先に位置する。



第2図　千久里城実測図（氷見高校1961）



第３図　千久里城縄張図（高岡徹氏作成）高岡1990、氷見市教委2001　S＝1/2,500



第４図　千久里城縄張図（佐伯哲也氏作成）佐伯1992　S＝1/2,500
※方位を合わせるため天地逆にして掲載

A郭は標高137mで、4×10mの最高所と、その東側の一段低い6m×5mの平坦面からなる。最高所からは、阿尾城跡や上庄川中下流域の平野、十三谷の南半と守山城跡、さらには伏木・岩瀬方面の富山湾岸まで見通すことができる。A郭は、物見台として利用されていたのであろう。なお、A郭南側の尾根には堀切が2本配置されている。

B郭は50×30mの規模で、C郭側に土塁がある。C郭は30×20mの規模で、D郭側に土塁がある。D郭は40×25mの規模である。郭の標高は、B郭が119m、C郭が117m、D郭117mであり、C郭とD郭はほぼ同じ高さである。各郭の間は堀切で区切られており、B・C郭の間の堀切は空堀となってB郭東裾に回り込んでいる。また、三つの郭の両側面には帯郭がめぐっている。北西側の帯郭は、南端がB郭側に大きく入り込み、その下は大規模な竪堀になっている。B郭下から北へ延びる尾根には、堀切が2本配置されている。D郭から北東へ延びる尾根には、堀切が1本配置されているのに対し、D郭から東へ延びる尾根には堀切が3本配置されている。特にD郭裾の堀切は竪堀となって南東方向へ延び、谷底近くまで続いている。

A郭から東へ延びる尾根には、切岸・段・片堀切が連続し、E郭へ到達する。E郭は10×30mの規模で、北・東・南の三方向が切岸となり、縄張の東端になっている。またE郭北側の中腹からは北へ下る竪堀があり、これはD郭東裾から延びる竪堀と谷底で連結している。

以上、現状の千久里城跡の構造をみると、東側、特にE郭尾根とその北側の谷に対して厳重な防御が施されていることがうかがえる。

第3節　発掘調査の成果

昭和63年度の調査

千久里城跡では過去に1度、発掘調査が行われている（大野1992）。

調査は中尾地区のテレビ共同受信アンテナ建設に先立ち、昭和63年11月17日から12月13日までの延べ12日間、氷見市教育委員会が主体となって行った。調査地点はA郭三角点東側の一段低い場所で、調査面積は7.5㎡である。

調査区では柱穴不明の石敷遺構と穴が確認され、古代土器・中世土師器・鉄釘が出土した。土師器は15世紀中頃と16世紀初め頃のものである。

この調査成果により平坦面全体に遺構が残る可能性が出たため、テレビアンテナは工法を変更し、A郭南の斜面に建設された。

平成16年度の調査

今年度の調査は、測量調査の補足として、堀切・空堀部分に3カ所の調査区を設定して行った（第7図）。調査期間は平成17年3月16日から3月25日までの延べ5日間である。

調査はいずれも人力により、地山岩盤層まで掘り下げた。

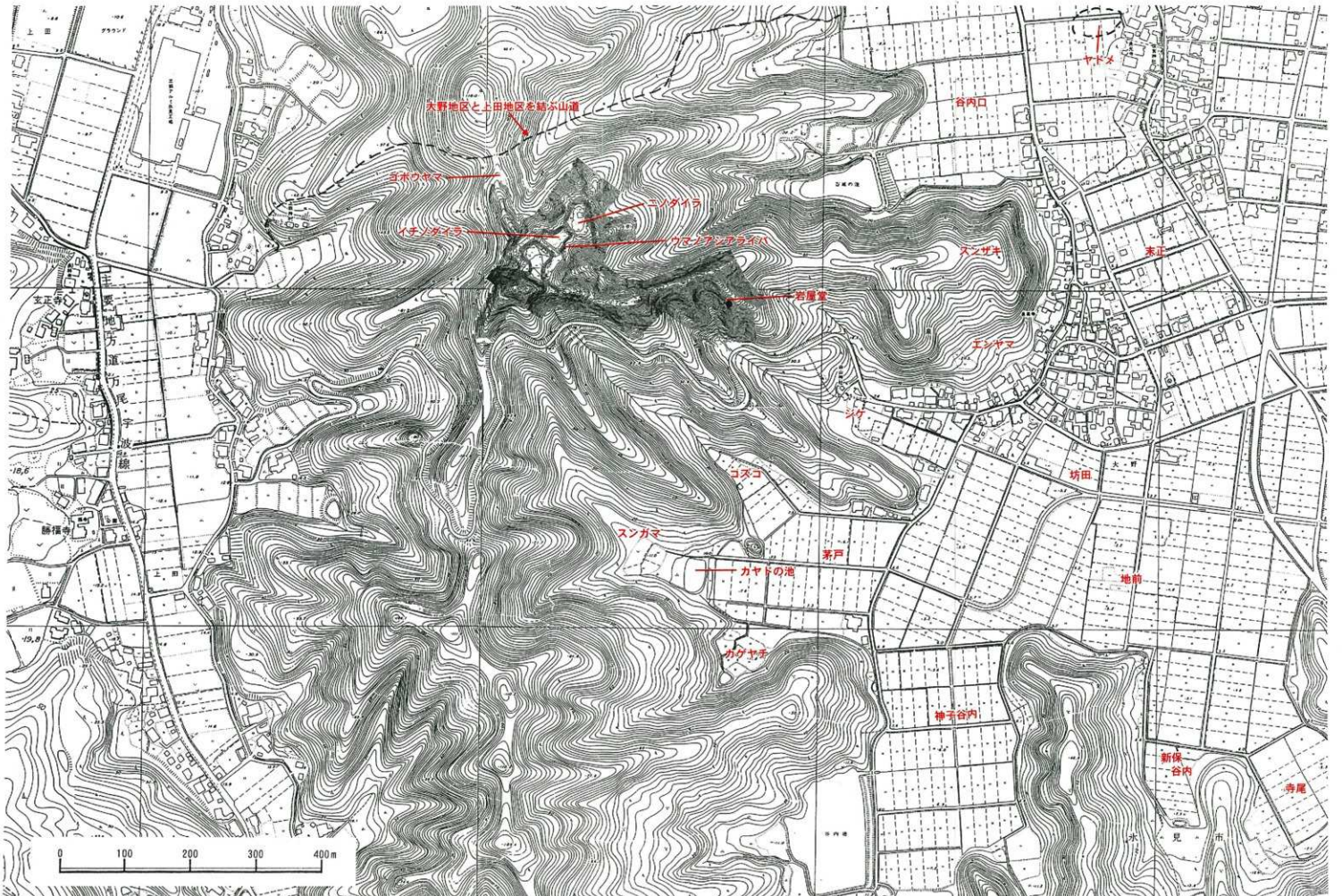
Iトレンチ（第8図）

B郭東側の空堀の様子を確認するために設定した5.5×1mのトレンチである。

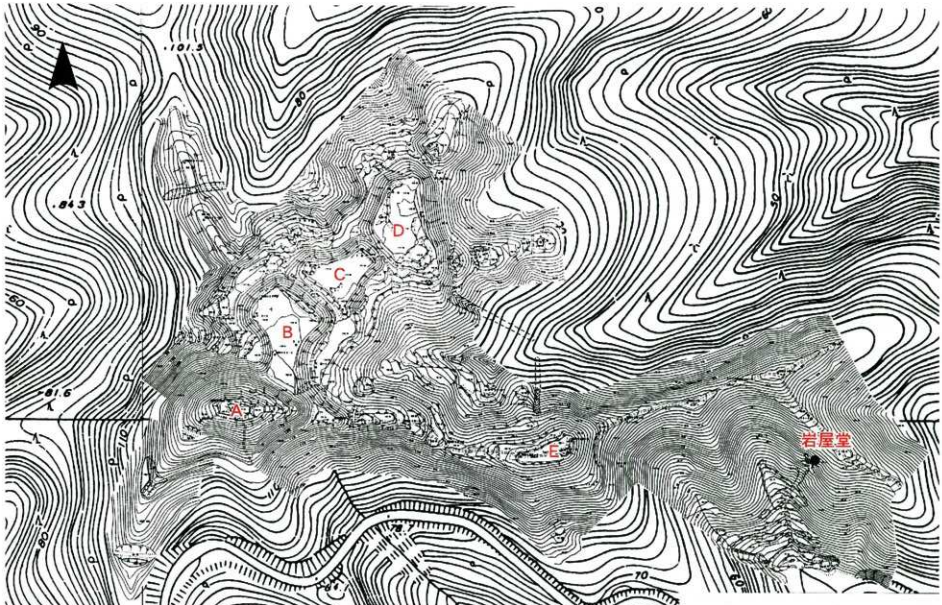
この空堀は、B郭とC郭の間にある堀切がB郭東側にまで延長したものである。空堀は、B郭北東角から郭の裾に沿いながら南へ延び、B郭東南角付近で一旦途切れる。現況での長さは約35m、幅は4～5mである。

発掘調査の結果、この空堀には一度改変されていることが判明した。

最初の空堀は、現況よりもかなり深く掘られたものであり、堀底は現地表面から2.3mの深さである。



第５図　千久里城跡周辺平面図（S＝1／5,000）



第６図　千久里城跡平面図（S＝1／2,000）

断面はいわゆる薬研堀の形態を呈しており、斜面の傾斜角度は東西とも40～50°である。

この空堀は、第７・８層によって底部から約70cmが埋没したのち、第６層によって途中まで埋め戻され、現地表面から深さ60cmほどの浅い堀に改変されたと考えられる。

この浅い堀の覆土である第５層から中世の珠洲と土師器が出土した。

Ⅱトレンチ（第９図）

Ｂ郭とＣ郭の間にある堀切とテラスの様子を確認するために設定した５×１ｍのトレンチである。

現況ではＢ郭北端の土塁の下に幅約２ｍ、長さ約30ｍの堀切があり、さらにその北側のＣ郭裾には幅約２ｍの犬走り状のテラスがある。

発掘調査の結果、この堀切も一度改変されたことが判明した。

最初の堀切は、現在テラスになっている部分から掘り込まれており、堀底は現地表面から２ｍの深さである。断面は薬研堀の形態を呈し、斜面の傾斜角度は北側で約30°、南側で50°である。

この堀切を第２・４～11層によって埋め立て、テラスが造成された。堀切は、まず第11～８層の順に南側斜面が埋められ、次いで地山岩盤を拳大に砕いた第７層を一気に盛り、第２・４～６層でテラスを造り出している。第７層には若干拳大の川原石も混ざっていた。そしておそらくこの作業と同時に、新たにＢ郭の裾に幅の狭い堀切が掘削されたと考えられる。新たな堀切の底は現地表面から１ｍの深さである。断面は薬研堀の形態を呈し、斜面の傾斜角度は南北とも約50°である。

第７層から土師器細片が出土した。

Ⅲトレンチ（第10図）

Ｃ郭とＤ郭の間にある堀切の様子を確認するために設定した2.5×１ｍのトレンチである。

発掘調査の結果、堀切の底は現地表面から1.1ｍの深さであることが判明した。断面は薬研堀の形態を呈するものであり、斜面の傾斜角度は50°から60°である。

なお、このトレンチから遺物の出土はなかった。

遺物（第11図）

出土遺物のうち、Ⅰトレンチ出土の３点を図示した。

１は中世珠洲中型甕のＬ縁部である。口径は38cm、胎土は白細砂粒を多く含み、２㎜ほどの白砂粒を若干含む。焼成は良好で、色調はHue ５Ｂ６／１青灰色である。珠洲編年のⅣ期後半、14世紀後半のものであろう。

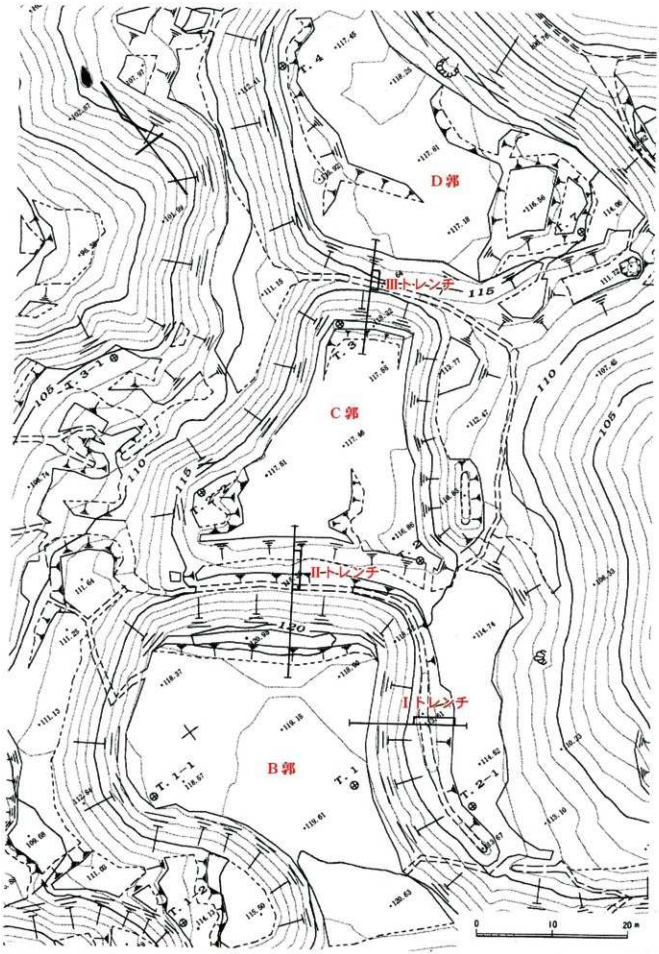
２は中世土師器小皿破片である。口径は8.4cm、胎土は白細砂粒と海綿骨片を若干含む。焼成は良好で、色調はHue 7.5ＹＲ８／８黄橙色である。15世紀中頃のものであろう。

３は中世土師器小皿破片である。口径は８cm、胎土は海綿骨片を若干含む。焼成は良好で、色調はHue 7.5ＹＲ７／６橙色である。15世紀中頃のものか。

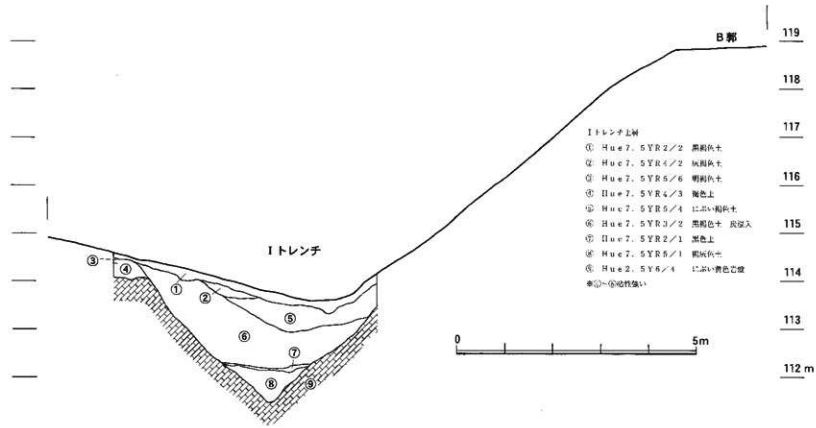
まとめ

今年度の発掘調査は堀部分の３カ所、面積は合わせてわずか13㎡であったが、表面観察だけでは得ることのできない新たな知見を得ることができた。

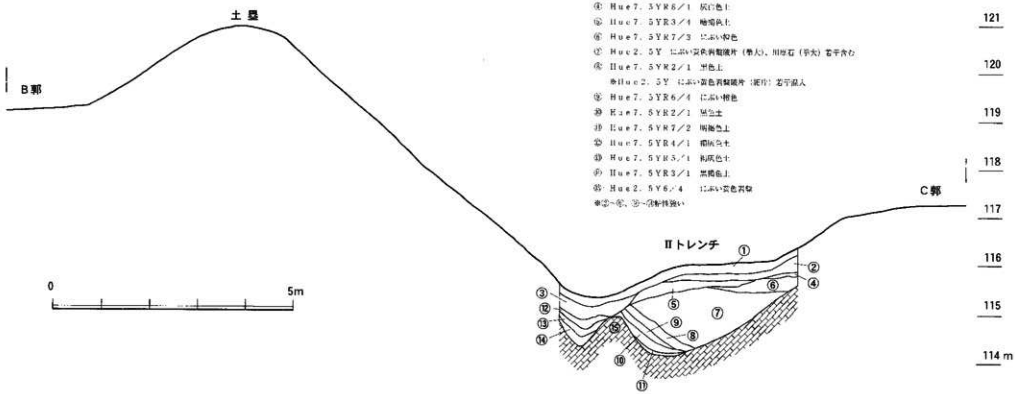
特に、ⅠトレンチとⅡトレンチではそれぞれ堀部分が一度改変を受けていることが判明した。これらの改変は、共に当初あった堀を埋め立て、犬走り状のテラス面を造り出す造作である。ただ、Ⅰトレンチが黒褐色土によって空堀を埋め立て浅くしたものであるのに対して、Ⅱトレンチは地山岩盤破片で堀切全体を埋め立て、その横に新たな堀切を掘削するものであり、両者の内容には差が認められる（第12・



第7図　トレンチ配置図（S＝1／500）



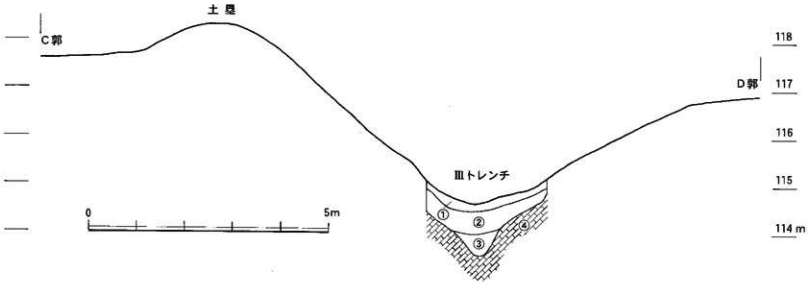
第8図　Iトレンチ断面図 (1/80)



Ⅱトレンチ土層

① Hue7．5YR2／2　黒褐色土
② Hue7．5YR3／3　暗褐色土
③ Hue7．5YR4／6　褐色土
④ Hue7．5YR6／1　灰白色土
⑤ Hue7．5YR3／4　暗褐色土
⑥ Hue7．5YR7／3　にぶい橙色
⑦ Hue2．5Y　にぶい黄色粘質細砂（多大）、川原石（多大）若干含む
⑧ Hue7．5YR2／1　黒色土
　※Hue2．5Y　にぶい黄色粘質細砂（細粒）若干混入
⑨ Hue7．5YR6／4　にぶい橙色
⑩ Hue7．5YR2／1　黒色土
⑪ Hue7．5YR7／2　明褐色土
⑫ Hue7．5YR4／1　褐灰色土
⑬ Hue7．5YR3／1　黒褐色土
⑭ Hue2．5Y6／4　にぶい黄色粘質
※②～⑥、⑨～⑬粘性強い

第9図　Ⅱトレンチ断面図（1/80）



第10図　Ⅲトレンチ断面図 (1/80)

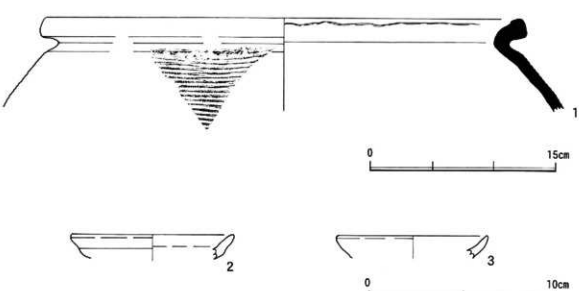
Ⅲトレンチ土層
①Hue7．5YR2／2　黒褐色土
②Hue7．5YR3／3　暗褐色土
③Hue7．5YR3／2　黒褐色土
④Hue2．5Y6／4　にぶい黄色砂質
④③・③粘性強い

13図)。また、改変の時期を示す遺物の出土もない。従って、両トレンチの改変が同時に行われたものであるかどうかについては、それを断定する資料は得られていない。しかしながら、この堀がB郭を防御する一連のつながりをもった堀であること、結果的に堀とテラスという同様の施設を造り出していることから、ここでは改変が同時に行われたものと考えたい。

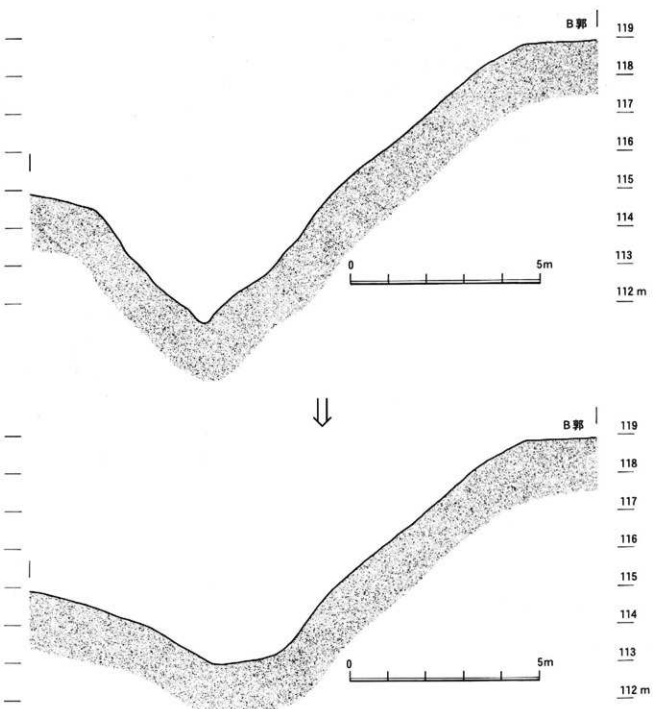
一方Ⅲトレンチでは、現況よりも堀底が深く、角度も急であることが確認できた。

出土遺物は少なく、時期のわかるものはⅠトレンチ出土の3点のみである。これらはいずれも改変されたあとの空堀覆土からの出土であり、廃城後の二次的堆積の可能性が高い。珠洲甕は14世紀後半頃、土師器は15世紀中頃の資料であるが、甕は使用期間が長い資料であるため、これらは同時期の可能性もある。なお、昭和63年度の調査では、15世紀中頃の土師器がまとまって出土しており、今のところ千久里城では15世紀中頃の資料が最も充実している。

Ⅰトレンチ・Ⅱトレンチで確認した城の改変がいつ頃行われたものであるかについては、第4章で改めて考察を行いたい。



第11図　遺物実測図 (1=1/3,2・3=1/2)



第12図　B郭東側空堀変遷想定断面図 (1/100)

第13図　B郭C郭間堀切変遷想定断面図 (1/100)

第4章　ま　と　め

史料にみえる千久里城と竹里山

ここではまず、史料にみえる千久里城・竹里山についてまとめておきたい。なお、関連する史料は付編にまとめた。

まず、千久里城については、南北朝期の史料に名前がみえる。

付編史料一は、観応3年（1352）の軍忠状である。

将軍足利尊氏と弟足利直義の対立に端を発した観応の擾乱は、直義方の有力武将である桃井直常が、康永3年（1344）から観応2年（1351）まで断続的に越中守護であったため、越中は反幕府方の拠点となっていた。観応3年6月、桃井氏討伐のため能登守護吉見氏の軍勢が越中へ侵攻し、8月まで氷見北部地域一帯で激しい合戦が続いた。この時、桃井方の拠点のひとつに「千久利」城があった。

付編史料二は、延文4年（1359）の軍忠状である。

史料一の合戦があった観応3（改元して文和元）年の9月までに、井上俊清（暁悟）が越中守護に復帰した。井上は、桃井直常以前の越中守護であったが、康永3年（1344）に解任され、一旦追討されている。井上の再登用は、足利一族の細川氏・斯波氏を投入するまでの中継ぎ的意味であったとみられ、井上は延文元年（1356）12月から同4年までの間に再度罷免された。同4年7月その討伐のため能登守護吉見氏の軍勢が越中へ侵入し、10月には井上方が越後境に追撃され没落している。この時井上方の拠点のひとつに「千久里城」があった。

史料一での主戦場は木谷城周辺、史料二での主戦場は白河城及び木谷城周辺であり、二つの史料に見る限り、千久里城は出城的性格であったと考えられる。

中世史料に千久里城の名前がみえるのは、今のところこの2点のみであり、戦国期の史料には登場しない。

さらに千久里城は、近世における城郭の基礎的文献である「越能賀三州志」「越中志徴」などにも記載されず、加賀藩関係の絵図類に記された古城跡からも欠落している。

ただ、「越中古城館跡記」に中尾村古城としてわずかに記載されており（付編史料三）、城としての記憶が全く失われていたわけではないようである。

さて、城跡のある場所は、A郭部分が周囲の丘陵稜線からひときわ高い独特の地形を呈しているため、「竹里山」の名前で呼ばれている。竹里山は近世には富山湾に敷設される定置網の位置を決める「山月」の目印になっていた（付編史料四・五）。

一方、竹里山の中腹には岩屋がある。この岩屋については、「越中志徴」に宝暦14年（1764）の旧跡調書を引用した記事がある（付編史料六）。また、享保20年（1735）の氷見三十三所観音霊場の木札によれば、竹里山は第17番札所であった（付編史料七）。この岩屋の起源は不明であるが、地元には竹里山に真言宗の寺院があったという伝承があり、中世にまでさかのぼる可能性がある。

このように、近世において千久里城は、地域的には城としての伝承が残っていた可能性があるものの、公的には城跡としての認識はなかったと考えられる。その代わりこの場所は、その地勢や岩屋の存在から「竹里山」の名称で、目印となる山、あるいは信仰の山として認識されていたといえる。

近代に入ってからも、「氷見郡志」（明治42年刊行）には飯久保城・阿尾城・森寺城が掲載されるが千

久里城の記載はなく、また『富山県史跡名勝天然記念物調査報告』第十四輯（昭和十五年刊）に掲載されている「阿尾城址」（島尾正一著）の中でも、周辺の城跡として引用されているのは飯久保城・池田城・中村城・森寺城であり、やはり千久里城についての記述はない。

従って竹里山が城跡として広く認識されるようになったのは、戦後のことと考えられる。

郷土史関係の文献の中で最も早く千久里城を紹介しているのは、『氷見の文化財』（氷見市文化財保存会、昭和31年刊行）であり、城跡では阿尾城・森寺城・飯久保城・池山城・白河城とともに、竹里（千久里）城が掲載されている（付編史料八）。

氷見市は昭和27年8月1日に氷見町と二つの村が合併して誕生し、その後も周辺の村々との合併が進み、昭和29年4月1日に現在の市域となった。氷見市文化財保存会は、同29年9月に新氷見市の文化財保護・顕彰を目的として設立され、市教育委員会内に事務局が置かれた。史跡めぐりや旧家の史料探訪などの活動を行う中で、新市の文化財目録として作成されたのが『氷見の文化財』である。この本のあとがきには、掲載する文化財を選定するために設けられた基準・原則が九箇条掲げられているが、その中に「必ず特別委員が最近調査して確認したものに限る。（伝聞によるものは採らない）」とある。この本の執筆を担当した特別委員は、会長の鳴尾正一氏のほか、斉藤道保、児島清文、橋本芳雄の各氏であった。文責は明らかではないが、「竹里城址」本文の記述からしても、実際に現地に足を運び、遺構を確認しているものと考えられる。

このように千久里城は、町村合併を機縁に地域の文化財が見直される中で、文献史料と現地遺構が認識されて、氷見市の主要な城郭のひとつに位置づけられるようになった。

南北朝期の千久里城

第2表は氷見市内の主要な城郭33カ所について、規模と立地の傾向を示したものである。規模の傾向を示す要素として主郭の面積を縦軸にとり、立地の傾向を示す要素として主郭標高と平野もしくは最も近い集落との比高を横軸にとった。

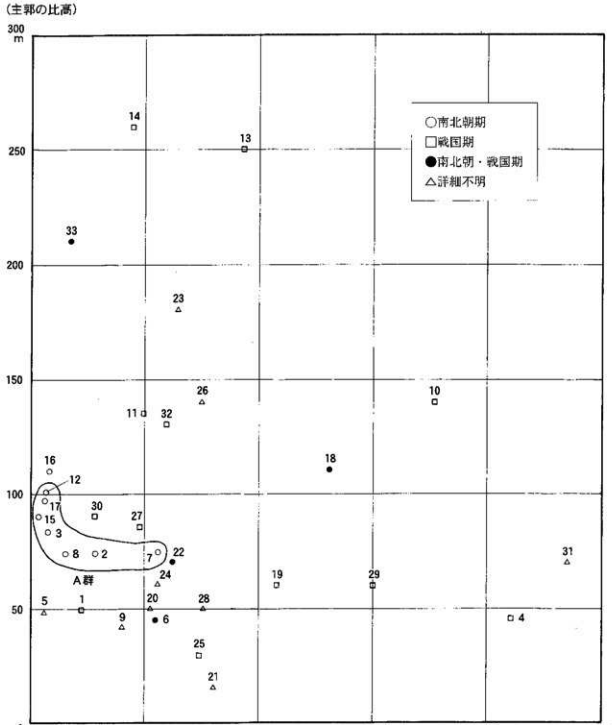
主郭面積は30㎡から2350㎡までみられるが、大部分は800㎡までにおさまる。逆にそれを越える城郭は、惣領コツデラ城・阿尾城・森寺城・飯久保城・千久里城・中村城・荒山城である。惣領コツデラ城は空堀によって二つに仕切られた郭の周囲を切岸と一部帯郭で防御した城であるが、文献史料や伝承にまく詳細不明である。残りの城はいずれも規模が大きな城として、氷見を代表する城郭である。

一方主郭の比高は15mから260mまでに分布するが、110m以下のものと、125m以上のものとの、二つの傾向に分かれる。特に比高が150mを超えるものでは、小竹山城（33）は国泰寺発祥の地である摩頂山に築かれ、宗教施設との関連が指摘される城であり、残りの二例はいずれも能越国境に築かれた城である。

第2表で丸く括ってA群としたのが付編史料一と二にみえる城郭である。これらのうち稲積城は、史料にみえる三角山城の可能性が指摘されている（氷見市教委1992）。また、飯子頭城は高岡市の守山城に比定されること、関開要害と氷見城は現地比定ができていないことから、表から省いてある。

A群に、観応3年（1352）の天野遠政代堀龍宗重軍忠状（天野文書）にみえる水谷城（16）を加えると、南北朝期の城郭の特徴として、主郭の規模が小さく、比高が75～110mの地点に城が築かれるという傾向がうかがえる。

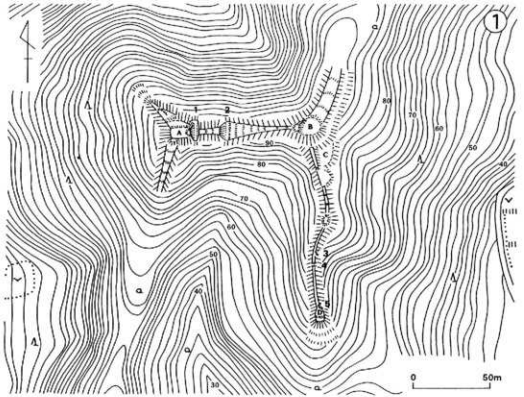
また、応安年間（1368～75）に備後国から上座池田村に入部した三善朝宗の居城である池田城（22）が、A群に近い要素をもつことも見て取れる。

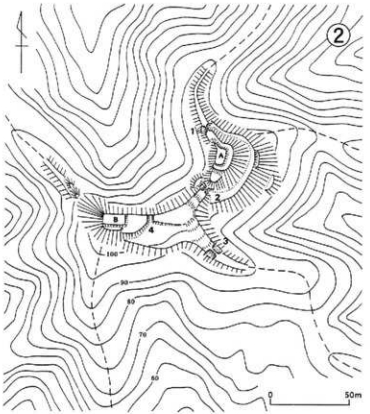


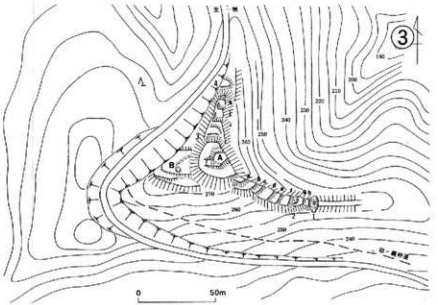
第2表　氷見市内主要城郭の規模・立地傾向

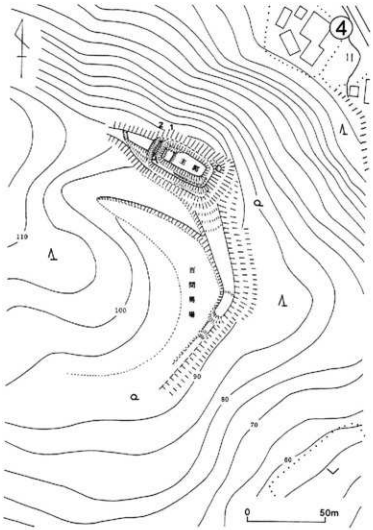
※A群は、付編史料一・二にみえる城郭

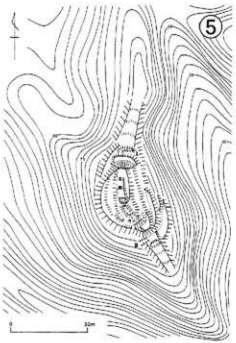
1：一夜城	12：芝峠城	23：一の島（岩瀬）城
2：白河城	13：荒山城	24：島崎城
3：宇波城	14：石場山（柴峠）城	25：久津呂城
4：阿尾城	15：稲積城	26：高松城
5：阿尾島尾山砦	16：水谷城	27：堀田城
6：山崎城	17：木谷城	28：神代城
7：八代城	18：千久里城	29：飯久保城
8：八代西城	19：中村城	30：惣領砦
9：指崎城	20：飛滝城	31：惣領コツデラ城
10：森寺（湯山）城	21：新屋城	32：御林山（鞍骨山）城
11：海老瀬城	22：池田（小浦）城	33：小竹山（摩頂山）城

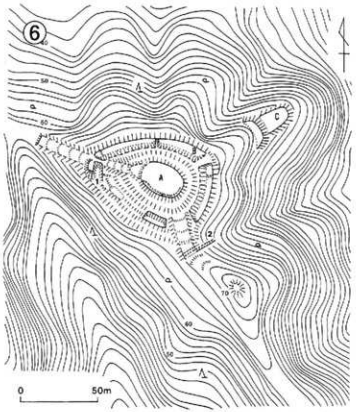


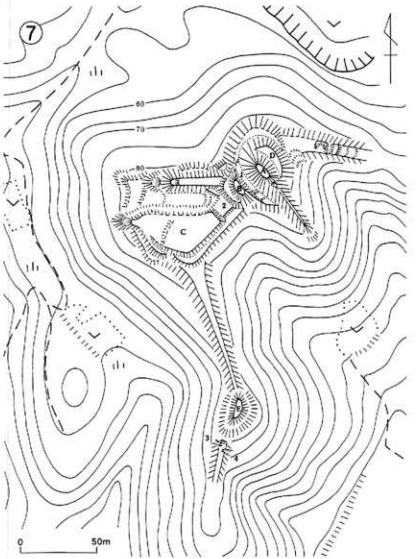












第14図　氷見市内の南北朝期城郭（S＝1/2,500）、①宇波城②木谷城③芝峠城④白河城⑤八代西城⑥八代城⑦稲積城 いずれも高岡徹氏作成（氷見市教委2001より）

A群の城郭については、さらに第14図に縄張図を示した。これらからうかがえる特徴を列挙すると、a）全体的に郭や堀など縄張が小ぶりである、b）主郭の周囲に帯郭がめぐる例が多い、c）縄張に自然地形が残る、といった特徴がつかめる。

このことから、麓の村からやや離れた高所で、街道などを見通すのに都合の良い場所に、少ない工事量で少人数の兵を配した拠点をいくつも設けるという南北朝期の戦闘の特徴が読み取れよう。

千久里城の規模をA群の規模と比較すると、第2表で示した傾向のように主郭の規模が大きいが、それ以外にも全体的に縄張の規模が大きいことがわかる。また前節で示したように、南北朝期の千久里城は出城的な性格であったとみられる。従って、南北朝期の千久里城は現在の縄張よりも小規模なものであった可能性が高く、現在残る遺構は戦国期に改変されたものであると考えたい。また、今回発掘調査で確認したB郭周囲の堀も、同様の理由で戦国期のものであろう。

戦国期の千久里城

第3章で示したように、千久里城では今のところ15世紀中頃の資料が多く出土している。従って、遅くともその頃から城の再利用が始まり、南北朝期の縄張が大幅に拡張・改変されたものと思われる。

さて、発掘調査によって、当初B郭とC郭の間が大規模な堀切によって区画されていたことが判明した。この堀切は、15世紀の城再利用の時に他の一連の縄張改変工事と共に構築されたものであろう。この時の縄張は防御に主体がおかれ、B郭・C郭それぞれの独立性が高かったものと考えられる。

その後、B郭を取り巻く堀を改変する工事が行われ、C郭側にテラスが設けられた。この工事の目的は、B郭の防御を堅固なまま維持するとともに、C郭への東側からの出入りを容易にするものであったと考えられる。この改変工事が他の場所にも及んでいたかどうかは明らかではないが、少なくともこの工事によってC郭の防御性が弱められ、B郭とは別の機能がC郭に与えられたと考えられる。山城において出入りを容易にした郭を設けたということは、すなわち、その部分における日常の居住性を高めたということではないだろうか。改変工事によって千久里城は、居住域を含んだ山城に改められた可能性があるといえよう。

平地の館から山城に拠点を移すことについては、16世紀第2四半期における全国的な傾向とされ（金子・前川1993、千田2000）、近辺の例としては能登畠山氏の七尾城があげられる（七尾市教委2002、前川2003）。

わずかな調査事例しかなく、千久里城を拠点城郭と位置づけるにはなお検討を要するが、この改変工事の時期については、上記の動向に沿ったものと想定し、16世紀第2四半期にあてておきたい。

ただ、千久里城の縄張には織豊系城郭の特徴となる明確な虎口や通路がみられない。また各郭間の連絡が不十分で独立性が強く、求心性に乏しい。これらのことから、千久里城は戦国期の途中で廃され、織豊期までは続かなかったと考えられる。

千久里城の城主について

さて、戦国期の千久里城城主については、史料にまったく記されていない。ただ、縄張調査によってその大規模な遺構の状況が明らかになるにつれ、その城主を国人鞍河氏とする考えが定着してきている（高岡1990、佐伯1992）。

今回の調査から、千久里城は東側に向けて防御が堅く、その一方でC郭にみられるように東側からの出入りに配慮していたことが判明した。すなわち千久里城は東に大手を向けていると考えられ、鞍河氏の居城である可能性がより強まったと考えられる。

鞍河氏の動向については、近年横澤宏生氏の研究によって大きく進展し、「氷見市史」３資料編中世にも一連の史料が掲載された。それらの成果による鞍河氏関連年表を、第３表にまとめた。

鞍河氏の出自は不明であるが、その名字から上庄川下流右岸の鞍川地区を本貫とする国人と考えられる。鞍川地区のうち、現在氷見市老人福祉センター寿養荘のある辺りの地名が「城屋敷（シロヤシキ）」であることから、鞍河氏の居館跡ではないかとする説もあるが（児島1962）、今のところ地名以外に根拠となる資料はない。[5]

鞍河氏の活動の多くは、畠山氏の越中守護代神保氏の被官としてのものである。特に、永享年間には神保氏の下で山城国乙訓郡代として活躍する一方、明応年間に将軍足利義材（義稙）が越中放生津に滞在したときは、神保氏名代として上京し、将軍の復帰について斡旋をおこなっている。

また、能登との関わりも深かったと考えられ、応永年間の初出史料からして能登での活動がみえ、応仁・文明の内乱のおりには、越中方と能登方の間で翻弄された様子がうかがえる。さらには天文年間に能登畠山氏重臣の勢力争いに巻き込まれている。

このように鞍河氏は、又守護代クラスの有力な国人として、越中のみならず、能登や京都にも活躍の場を広げ、中央や北陸地域の諸勢力と政治や文芸を通して盛んに交流していたといえる。こうした活動が千久里城の縄張にも反映していたのではないだろうか。

さらに、鞍河氏は天文19年（1550）に滅亡しており、その時点で千久里城は役割を終えた可能性が高い。千久里城の縄張もそれを裏付けているようである。近世のほとんどの史料から千久里城が欠落してしまったのは、織豊期以前に滅亡してしまった鞍河氏の居城であったため、佐々氏や前田氏には、越中支配の過程で直接対象となる山城として認識されずにいたためであろう。

注

この場所は朝日山丘陵北側裾にあたり、その麓には古くから霊泉が湧いていたという。これに着目した地元の菊池治平が、明治30年代にこの地に鉱泉宿を開業した。その後経営者が数度交替したが、鞍川鉱泉（鞍川の湯）として営業が続き、戦時中には日本医療団が買収し、結核保養所として運営された。その後、昭和23年に富山県農業会が委託経営する厚生連氷見病院となり、さらに同36年氷見市に移管され氷見市民病院となった。昭和41年に市民病院が新築移転したあとは、同48年から寿養荘として存続している。

このようにこの場所は古くから建物の建築・改築が相次いだため、地割など旧状を復元することはできず、遺物の採集もない。

第3表　鞍河氏関連年表

応永6年（1399）頃：能登守護畠山基国の守護使として鞍河氏の名前がみえる（横澤2003）

永享元～6年（1429～34）：山城守護畠山満家、同守護代神保久吉・国宗の下に、乙訓郡代として鞍河清貴・久利があった（82～88）

文明4年（1472）8月頃：越中は東軍畠山政長派、能登は西軍畠山義統領国であったが、鞍河氏は東軍から西軍に寝返り、さらに東軍へ復帰するなど動揺する（105）

明応2～7年（1493～98）頃：神保氏の意を受けた鞍河誠広が、東北から熊野へ参詣する一行に対して保護と便宜を与えるよう椎名氏側へ依頼する（128・129）

明応6年（1497）7月：翌年7月にかけて鞍河兵庫助が上京し、将軍足利義材の復帰について周旋する（124～126）

明応7年（1498）夏：猪苗代兼載が鞍河兵庫助第を訪れ連歌を行う（127）

天文13年（1544）：前年から続いた神保氏と椎名氏の抗争について一応の和議が成立したが、土肥・齋藤・鞍河の紛争は続いていた（144）

天文年間中頃：椎名長常被官小間常光が諸方の有力者にあてた年賀答礼の書状案文に、鞍河平兵衛尉宛のものが含まれる（154）

神保長職の富山城守将に鞍河備後守の名前がみえる（155）

鞍河新蔵人らが、阿努庄年貢を横領する（157）

天文15年（1546）3月：鞍河職綱、西念寺（赤毛）と白山社（仏生寺）に禁制を下す（145・146）

天文19年（1550）10月：能登畠山重臣遊佐続光と温井総貞の軍事衝突で、遊佐方に与した鞍河清房・清経父子が討死する（150・151）

永禄年間（1558～70）：鞍河平兵衛尉旧跡耳浦・川尻代官職について、土肥筑前と長沢某が争う（175）

※末尾の数字は『氷見市史』3資料編一の中世史料番号と一致する。

参考文献

大野　究　1992「千久里城跡発掘調査概要」『氷見市立博物館年報』第10号

金子拓男・前川要編　1994『守護所から戦国城下へ』　名著出版

児島清文　1962『氷見市地名考』

佐伯哲也　1992「氷見市中部の城郭について」『氷見春秋』第26号

鳴尾正一　1940「阿尾城阯」『富山県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14輯

千田嘉博　2000『織豊系城郭の形成』　東京大学出版会

高岡　徹　1990「氷見南部地域における中世山城とその性格」『富山市日本海文化研究所紀要』第４号

富山県氷見郡役所　1909『氷見郡志』(1984年、新興出版社覆刻版)

富山新聞社　1973『越中志徴』(復刻版)

七尾市教育委員会　2002『史跡七尾城跡保存管理計画書』

氷見高校歴史クラブ　1961『故郷の城址』

氷見市　1998『氷見市史』３　資料編一　古代・中世・近世（一）

氷見市　2002『氷見市史』７　資料編五　考古

氷見市教育委員会　1992『氷見バイパス関連遺跡調査報告Ⅰ』

氷見市教育委員会　2001『氷見の山城』

氷見市文化財保存会　1956『氷見の文化財』

前川　要　2003「能登七尾城下町の空間構造とその変遷」『富山大学考古学研究室論集　憂気楼
－秋山逸午先生古稀記念－』　六一書房

横澤信生　1994「越中鞍川氏考」『富山史壇』第113・114号

横澤信生　2003「『弁山和尚教書之状』及び鞍川氏について」『富山史壇』第141号

付　編　千久里城関連史料

史料一

得田素章代子息斎藤六章房軍忠状案

得田文書

松雲公採集遺編類纂一三五

得田次郎左衛門尉入道素章代子息斎藤六章房申軍忠事右、今年親応三六月六日、為越中国凶徒対治、当国能州守護吉見二河守殿御発向之間、御供仕之処、依手分里見左京亮仁被付乎、同九日攻寄木谷・師子頭・三角山等之敵陣、鴉坂取陣畢、

一、同十四日桃井刑部以下御敵、所馳集氷見湊、可寄来当陣之由風聞之間、同夜中仁押寄彼湊、致散々合戦、北市在家懸火間、御敵等引退南宿、引大橋中間令没落之間、打返当陣畢、

一、同十五日押寄三角山城、致散々太刀打、討取御敵白井弥八・渡部源八等畢、彼類二人大将見参之族、被懸稲積河鰭之処、桃井刑部以下御敵等、白千久利・木谷・氷見・師子頭等、致後攻之間、及散々合戦、悉追散畢、

一、七月一日押寄木谷城之処、御敵等出向于彼城麓尼坂之間、致合戦、追籠城内畢、

一、八月十二日寄寄木谷城之処、出向尼坂之間、終日致合戦、又追籠御敵於城内畢、此外日々夜々於在々所々、或致野臥合戦、或矢戦以下軍忠、異于他者哉、且此等次第、為大将御前合戦也、然早賜御証判、且施弓箭面目、且為備後代之亀鏡、恐々言上如件

親応三年九月　日　　承了　在判

史料二

得田章親代大隅直輝軍忠状案

得田文書

松雲公採集遺編類纂一三五

能登国得田乙王丸代大隅彦六直章申軍忠事

右、越中国前守護井上入道暁悟・同河内前司章俊可追罰之由、被仰下之間、依為乙王丸幼稚、差遣代官直章、去七月十八日、越中国長坂口令発向之処、白河城没落畢、即於彼城并閘間要害、為城持長々致忠節、属于形部少輔殿御手、同九月廿日、自被仗芝当下并木谷御陣以来、於所々抽忠勤、宇波・八代・氷見・千久里城攻落畢、同十月四日、囚徒等没落之間、至于宮崎・堺河馳向、致忠節畢、此条弥郡弾止忠見知之上者、早賜御証判、為備向後亀鏡、恐々言上如件

延文四年十一月　日　　承了　在判

史料三

越中古城館雑記

富山県立図書館蔵（武部氏旧蔵本）

著者不詳。成立年代不詳。

中尾村古城　幅六間、長弐拾間程、菊池入道殿阿尾村ゟ城迄五町程

史料四

元禄十二年

灘浦網場由日塚本改書上ヶ申帳

『近世越中灘浦漁業史』所載文書

（略）

一千ヶ瀧本岸　前山ハ字波宮林之かミのはへはつれ松の木と石動山御前と見合、かミ山ちくりとゆめ坂のおきノ舟と見合、つつ本弐拾、松ケ崎本岸より弐百三拾尋之なわはりニてトし申定

（略）

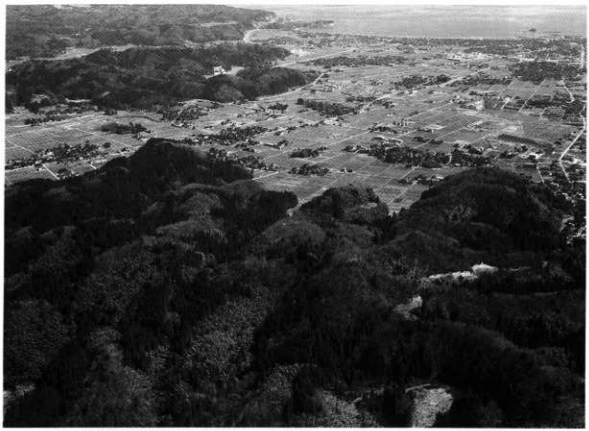
史料五
文化八年
灘浦三季網場本岸山見辻本并先
運上銀場役銀作人等書上申帳
【近世越中灘浦築網漁業史】所載文書
（略）
一千ヶ淵本岸前山宇波村御宮林之内上之林はつれ松木と、石動山御前と見合、上山泉村ちくり山と阿尾ゆめ坂沖ノ角と見合、辻本武拾三尋

史料六
【越中志徴】
○泉岩屋　宝暦十四年旧蹟調書に、泉村百姓持山之内に、奥行九間程、幅弐間程之穴にて岩屋と唱へ、内に護摩段とて少し高き所之有。然共堀申岩屋と相見ゆ。由来不知るとあり。

史料七
氷見三十三所観音霊場木札銘　大永寺文書
（裏書）
巡礼所
一番　宮村慶高寺　　十八番口名田村八幡山
二番　上山権現堂　　十九番池田村光良宮
三番同所慈尊院　　廿番梨谷紹光寺
四番同所本覚坊　　廿一番池田村観音堂
五番同所金光院　　廿二番谷屋村上房寺
六番同所無住庵　　廿三番加納村観音堂
七番西田村国泰寺　　廿四番同所宝光寺
八番氷見光禅寺　　廿五番下余川村興聖寺
九番同所西念寺　　廿六番長坂村光西寺
十番太田村江雲庵　　廿七番小境村大栄寺
十一番堀田村延暦寺　　廿八番小杉村右観音
十二番神代村大安寺　　廿九番阿尾村観音堂
十三番仏生寺村神社　　卅番氷見浦唐島
十四番阿原村神社　　卅一番稲積村観音
十五番十二ノ村実隆寺　　卅二番池田新村白雲寺
十六番氷見千手寺　　卅三番氷見朝日山上ノ寺
十七番中尾竹里山　　一小境□
大栄寺弟子」
享保廿乙卯二月十日始之、□上順道、「清水善□」

史料八
「氷見の文化財」氷見市文化財保存会
昭和三十一年
竹里城址　泉・中尾
竹里山（一四〇米）の頂上近い所に、城址がある。屋敷あと、空濠、土塁なども残っている。正平年間、吉野朝宮方の武将がここに拠り、能登の武家方吉見氏頼の軍に対抗したことが、得田文書に見えている。城址から氷見町は一望に収められる。

図　　版



(1)千久里城跡空中写真（西から）

(2)千久里城跡空中写真（西北から）

(1)B郭東側の空堀（北から）

(2)B郭東側の空堀（南から）

(1) Ⅰトレンチ（西から）

(2) Ⅰトレンチ（西から）

(3) Ⅰトレンチ土層（南から）

図版四

(1)B郭・C郭間の堀切（東から）

(2)B郭・C郭間の堀切（西から）

(1)II トレンチ（東から）

(2)II トレンチ土層（東から）

(3)II トレンチ土層（東から）

図版六

(1)C郭・D郭間の堀切（東から）

(2)Ⅲトレンチ土層（東から）

(1)B郭とその土塁（南から）

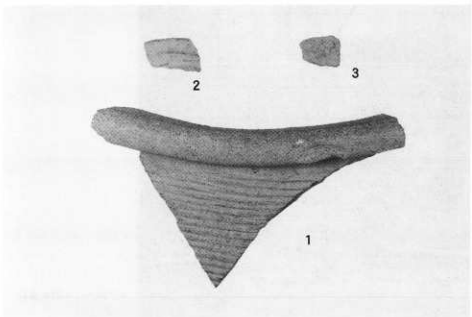
(2)B郭とその土塁（西から）

(3)B郭からA郭を望む
（北から）

図版八

(1)C郭とその土塁（南から）

(2)作業風景（北から）



(3)出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちくりじょうせき
書名	千久里城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第42冊
編著者名	大野 究
編集機関	氷見市教育委員会
所在地	〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号 TEL0766（74）8215
発行年月日	2005年3月31日

所収遺跡名	所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
千久里城跡	富山県 氷見市 飯久保	16202050	36° 136° 51′ 56′ 10″ 30″	20050316 ↓ 20050325	13m²	範囲確認 （測量調査の 補足調査）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
千久里城跡	城館	室町	堀	土師器 珠洲	戦国期に堀を改修

平成17年3月30日 印刷
平成17年3月31日 発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第42冊
千久里城跡

編集・発行 氷見市教育委員会
〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号
☎0766(74)8215（生涯学習課）

印刷 有限会社 ひふみ印刷社